

令和2年度

# 近畿大学附属小学校 学校評価 総括



## 近畿大学附属小学校

KINDAI UNIVERSITY ELEMENTARY SCHOOL

## 2020年度 教育方針など

建学の精神の具現化  
高い進路保障の健全な育成  
智・徳・体の健全化  
経営状況の健全化

### 1. 建学の精神・教育目標を理解し共有する

大きく変化する社会に対応できる人を育てる  
明るく元気、素直で真面目、一所懸命頑張る子ども  
「一隅を照らす人」を育てる

### 2. 教育のスキルアップ

しっかりとした教材研究を基盤とする授業の展開  
魅力ある授業のための工夫  
中学校入試の現状を把握し、入試問題に対応できる  
どの学年の担任も担当できる力量  
研修会（ICT、インクルーシブ教育など）への参加、読書などの自己研鑽に励む

### 3. 附属中学校への進学

中学校の授業に十分対応できる学力の確認テストを模索する  
基礎学力の定着を低学年から確認する方法を考える  
附属中学校への進学率をさらに高める

### 4. 新しい時代の教育への対応

タブレットなどのICTを利活用した教育に積極的に取り組む  
遠隔授業の研究、配信用教材の蓄積など  
Apple Distinguished Schoolの認定を目指す  
4技能が身に付く英語教育  
魅力あるプログラミング教育・道徳教育

### 5. 仕事の効率化、ペーパーレス化を図る

教材やプリントの共有、ICTの活用による効率化  
有給休暇、振替休暇の計画的取得

### 6. 危機管理意識の向上

組織対応を心がけ、報告・連絡・相談を確実にする  
非常事態への適切な対応  
一人ひとりが避難訓練などの機会を重視し、意識を高める

### 7. 附属幼稚園・小学校の接続を意識する

シームレスなカリキュラム・教育内容をさらに強める  
附属幼稚園から小学校への入学率を高める

### 8. 園児募集・児童募集

幼稚園・小学校の魅力適切・適時に発信する  
授業や教育内容の充実が伝わるように努力する  
常に新しい挑戦をする学校・教職員であること

(2) 学校評価の種類

自己評価：教職員による評価ならびに、児童アンケート・保護者アンケート・保教会運営委員アンケートによる結果

学校関係者評価：附属中・高等学校校長、附属幼稚園教頭、近友会会長、同窓会会長、保教会会長、校長、教頭、教務部長により構成する評価委員会が、自己評価の結果について評価するとともに、改善策等についての提言・勧告を行う。

(3) 評価基準

S：目標を上回って達成した（5.0～4.5） A：目標どおり達成した（4.4～3.8）

B：取り組んだが達成できなかった（3.7～3.1）

C：ほとんど取り組むことができず、目標も達成できなかった（3.0以下）

3. 自己評価について

(1) 教職員による評価

<p>1. 学校経営の重点 (1) 目 標</p> <p>○ 開かれた、信頼される学校づくりを進めるため、学校として、あるいは、学年やクラスとして抱えている課題に対し、組織的な学校運営を行う。</p> <p>○ 教育活動を広く公開、発信していくことで、在校生保護者との信頼関係づくりに努める一方、開かれた学校づくりを通して、定員確保に向けた児童・園児募集活動を展開する。</p> <p>○ 学校をあげていじめの未然防止に努め、いじめの早期発見と、組織的な事案対処を行う。</p>		
評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
①組織運営	初期対応に重点を置き、教育相談室長、学年主事、学年主任と連携を深め組織的な対応を行う。学年会、学年主任会を有効に活用し、必要に応じて柔軟に話し合いの機会を持つ。「報告・連絡・相談」を組織的に行う。	A
③情報の発信・児童募集活動	「開かれた信頼される学校づくり」の実現のため、学級通信、きんちゃんしょうちゃん日記等を通じて、家庭や入学希望者への情報発信をするとともに、定員確保に向けた児童・園児募集活動を展開する。	B
②いじめ対策	いじめが起きにくい環境、いじめを許さない環境づくりに努め、事案に際し、迅速な組織対応を行い、必要に応じてアンケートや個人面談・保護者面談を実施し、校内研修を充実する。	A
結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点		
<p>① 学校組織として、報告する手順が明確になっており、それぞれの報告・連絡・相談を組織的に行うことができている。定期的に学年会の日程も確保されており、教員間で連携を取りやすい環境になっている。また、教育相談室長や学年主事の教員からの行き届いたサポートにより、保護者対応や児童の様々な問題に関して、迅速に解決にあたることができている。</p> <p>② 新型コロナウイルスの影響もあり、外部への情報発信には慎重になった。一方、コロナ禍で例年以上に学校の様子を知りたい家庭が多くいた中、学級通信等によりクラスの様子を伝えることは保護者にとっても喜ばれた。また、保護者会等の開催が少なくなったため、学校からの連絡事項等、サイバーキャンパスからの発信の重要性が増した1年であった。</p> <p>児童募集については、校内外での募集イベントの機会が減少したが、コロナ禍においても、学校の取り組みが伝わるような発信を工夫して、広報を積極的に行っていく必要がある。少子化に加えコロナの影響も続くと考えられるので、引き続き、全教員が児童募集への意識を高くして日々の教育活動を行っていく必要がある。</p> <p>③ いじめ事案に対する組織対応の在り方が確立し、教員の意識向上も進んでいる。「いじめの早期発見」において教科担任制は、複数の目で児童を見ることができの良さがある。4年生以下では、担任だけでは気付きにくいところを主事や専科、T・Tの教員の目からも、児童からのサインを見逃さず、いじめ等の早期発見に努めていくことが大切である。</p> <p>年2回実施しているQUやHUMANを活用しながら児童の様子や思いを把握することができてい</p>		

る。それらの結果から、児童への対応の改善を考慮する機会があることはクラス経営においても効果的である。

## 2. 学習指導・研修の重点

### (1) 目標

- 本校の特色を生かしたシラバスの作成、具体的な幼小接続プログラムの実施を通して、本校独自の教育活動を追究する。
- 国語科・算数科の基礎学力の定着と、ICT教育をはじめとした学習環境の充実を図る。
- 教員一人一人が本校で果たすべき役割を自覚できるよう、各種研修会を充実させるとともに、指導力の向上を図る。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
①本校独自の幼小一貫教育の確立	新しい教科書の選定とシラバスの作成、各教科におけるプログラミング的思考を生かした授業の実践、『幼小連絡会』を通じた、具体的な幼小接続のための実践を行う。	B
②学習環境の充実	国語科・算数科の指導力向上と、児童の基礎学力の定着、意欲のある児童をより伸ばす取り組みの実践等、他校にない特色あるICT教育を実践するとともに研究を進める。	B
③近小の教員としての教員研修	若手教員対象の基本研修、ICT研修等の教員研修、児童の特性や保護者の多様化に対応するための教員研修、西私小連研修など各種研修会への参加及び伝達研修を実施する。	A

## 結果と分析・次年度への改善点

年度当初の休校期間中に、全教員で授業動画を作成し、Youtubeで動画を視聴する機会をつくれたことは、学習習慣を継続させ、保護者からのニーズに応えることができた。この取り組みで、他校との差別化を図ることができた。

- ① コロナ禍において、幼稚園との接続については、1年生担任と幼稚園年長担当教諭との二度の連絡会しか行えず、保育参観等の具体的な取り組みができないままであった。接続の具体的な姿を明らかにする取り組みを来年度は再開しなければならない。シラバスについては、年度内にまとめられるように整理中である。併せて、プログラミング的思考を生かした授業の実践については、特に、「B分類」「C分類」の実践に向けて教員が取りくみやすい方策を講ずる必要がある。
- ② 低学年教室にプロジェクターが設置された。その結果、低学年で放課後学習の機会を設けることができた。授業研究については、チームに分かれての実践を進める中で、一定の成果を得られたが、研究テーマを絞るなど改善すべき点がある。本校の教科論に沿った授業実践は勿論のこと、新しい指導観に対する共有が必要である。（宿題や課題の見直し、一斉授業の在り方、個別最適化等）3年生以上1人1台のiPadをどのように活用していくのか（ICTモラルについての指導等）。
- ③ オンラインによる研修が増え、個別に参加しやすくなったが、その内容の共有を図る機会をもつことが難しかった。また、参加について、個人の意識に委ねられていたことも、共有化を妨げる要因であった。若手座談会は来年度も継続し、定期的実施できるように年間計画に位置付ける。  
※私立小学校である本校が置かれている現状、並びに、基礎学力の低下が大きな課題としてクローズアップされてきている中、教材研究・授業準備・研修会などの諸業務を勤務時間内にどのように行っていくのか、「例年通り」ではなく、見直すべきものは見直し、指導効果の高いものは、継続するなどについて、判断するとともに推進していく必要がある。

## 3. 生活指導・児童活動・保健衛生・環境整備の重点

### (1) 目標

- 規範意識を育成し、高めていくための具体的な目標を設定し、学校全体で徹底した指導を行う。
- 子供たち自らが諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。また、異年齢交流を深め集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする態度を育てる。
- 体育的行事を通して、安全な行動や規律ある集団行動を体得し、運動に親しむ態度を育てるとともに、体力の向上を図る。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況

① 生活指導と安全	年間生活目標（挨拶、身だしなみ、登下校マナー）を柱とした全教員による徹底指導を進める。防犯・防災訓練等を計画的に実施する。保教会や地域、警察との連携を強化する。	B
② 児童活動	各集会やたてわり活動、附属幼稚園との活動を計画的に実施する。	B
③ 保健衛生と体育	体育的行事の計画的な実施と怪我予防や熱中症、感染症等の対策を講ずる。	A

結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点

- ① 朝礼や放送、委員会、週番の活動、校内の掲示などを通して、挨拶、身だしなみ、登下校マナーの向上に努めた。防犯・防災訓練、登下校方面別の集会等の十分行えなかった活動は、次年度以降に補っていく必要がある。児童の規範意識を高め、近小生としての誇りを持って過ごせるよう、引き続き、全教員による指導の徹底と工夫、家庭への啓発等が必要である。
- ② 集会や附属幼稚園との活動は、殆ど実施することができなかったが、縦割り活動や「近小フェスティバル」、「6年生を送る会」など、実施可能な方法を模索しながら実施することができた。機会が減ってしまったことによる影響が出ないように、次年度は取り組み方の工夫等、検討しながら実施していくことが望ましい。
- ③ 感染症対策を学校総体として取り組み、徹底して実施したおかげで、感染拡大や大きな事故等もなく教育活動を展開することができた。実施できなかった体育的行事が多い中で、運動会は運動集会という形式で、規模を縮小しながらも実施することができた。今後は、あらゆる状況を想定し、対応できるような計画の立案と家庭との連携を含めた対策をより一層考慮していく必要がある。

4. 進路指導・学習評価の重点

(1) 目 標

- 個々の学力推移を的確に把握し、進路に対する保護者の意向や児童の思いを尊重しながら進路指導を進めていく。
- 何事にも元気に真面目に頑張る態度を身に付けさせ、附属中学校・高等学校の6年間で十分についていける人物を育成していく。
- 進路追認を進めていくとともに、卒業生による進路学習を充実していく。

評 価 項 目	取 り 組 む 内 容 ( 指 針 )	達 成 状 況
① 適切な進路指導	個々の学習状況の把握に努め、必要に応じた支援を取り入れていく。また、高学年においては、各中学校の情報を収集・共有し、進路指導の充実を図っていく。	A
② 進路保障 (内部進学)	柔軟な進路選択と高い進路保障をさらに進めていく。特に、昨年度変更した内部推薦制度については、中学校との連携を図りながら、よりよい運用を進めていく。	A
③ 進路学習の充実	同窓会とも連携しながら、卒業生による進路学習を充実していく。	—

結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点

- ① 個々の学習状況の把握に努め、必要に応じて補充学習を取り入れた。また、3学期に行った「学力考査」においては、学年全体から見た個々の学習状況の分析をし、課題のある児童への指導の方向性を具体的に指し示すことができた。しかしながら、過去8年間の学力の推移を見ても、各学年、基礎学力の定着度は低く課題を残す結果となった。今後は、進路指導の観点からも、基礎学力の充実を図るべく、個々の教員の授業力の改善を意識した指導を継続していく必要がある。
- ② 努力評定を取り入れた内部推薦制度を運用し、内部推薦者50名(学年全体の42%)を決定した。また、一昨年度から「小学校での内定コース」を実現することができ、進学する児童の学力は、附属中学校の各コースの水準に相応な結果を概ね残している。次年度以降は、小学校での学力保障を含め、評価基準等の精査ならびに児童指導規定をもとにした判定基準をさらに充実させていく。また、1学期末に内部進学プレ判定を実施することで、内部進学に至らなかった児童に対応できるよう計画している。(昨年度推薦認定率90% 11人、本年度推薦認定率75% 29人)
- ③ 社会の状況に鑑み、卒業生による進路学習は本年度中止した。

## (2) 児童アンケートの考察

児童への「振り返りシート」には、この1年間、様々な活動を通して、「一所懸命頑張った」「頑張ってきたので、こんなことができるようになった」といった肯定的な自己評価が多く、子供たちが、学校生活を満喫している姿が伝わってきた。

一方、「身の回りの整理整頓」「丁寧な言葉遣い」「時間を守る」「自分で進んで学習をする」等について、自己評価が低い結果となった。この結果をしっかりと受け止め、子供たちの確かな成長に活かせるよう、教職員一丸となって教育活動を進めていく。

## (3) 保護者アンケートの考察

### －学校方針について－

学校方針・教育方針については、再度、建学の精神に立ち返り、叡智教育・道徳教育・健康教育の調和の取れた教育活動に努める。

併せて、「大きく変化する社会に対応できる人」「明るく元気、素直で真面目、一生懸命頑張る人」「一隅を照らす人」を育てるため、今後も伝統を引き継ぎながら、時代のニーズに応えられるよう教職員一丸となって取り組んでいく。近畿大学附属学校として、幼稚園・中学校・高等学校・大学との連携を一層深め、より充実した学園ならではの指導を推進していく。

### －学習指導について－

新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現するために教職員研修を進めるとともに、ICT教育機器を利活用して、自ら進んで学習に取り組める学習者の育成に努める。ICT教育については、賛否両論の意見を多数頂いた。真摯に受け止めるとともに、近畿大学学園の附属小学校として推進していく。そのため、来年度より、4年生以上の学年で個人持ちのiPadにて学習を進めていく。ICT機器の利活用については、21世紀を生きる子供たちにとって、学習に利活用するだけでなく、生活の中でも必要不可欠の機器になってくることが必定である。引き続き、低学年よりICT機器の正しい利用の仕方を身に付けさせるためのモラルやマナー等の指導を積極的に進めながら、さらに学習の幅を広げることができるように推進していく。また、子供たちが、楽しみながら必要な学力を身に付けることができるように、教材研究に裏打ちされた授業を進めることができるように自己研鑽に努める。

算数科の指導については、TTの体制を改めて、ST（サポートティチャー）の体制とし、子供たち一人ひとりの学習状況の把握に努め、必要な学力が確実に身に付けることができるよう、個別最適化を目指して、さらに改善を進めていく。さらに、コロナ禍の現状ではあるが、従来通り、校外学習や近畿大学との連携教育等、体験を通じた学習活動の機会を適宜設け、「本物に触れる」学習に継続して取り組んでいく。

### －生活指導・安全指導について－

本年度も「挨拶」「身だしなみ」「登下校マナー」を重点目標として、学校全体で取り組みを進めてきたが、残念ながら、保護者の皆様方からは、子供たちの挨拶の様子が悪化しているとの指摘を受けている。このことは、子供たちも同様に感じていることである。今後とも、各ご家庭のご理解とご協力を得ながら、「挨拶」を進んでできるよう具体的な方策等について追究していく。また、登下校の乗車マナーについては、お叱りの電話やメール等を度々頂いているのも事実である。乗車マナーをはじめ、公共マナーの徹底を各ご家庭のご協力を得ながら今後も引き続き進めていく。

「防災訓練」「交通安全指導」「被害防止教室」等の安全指導については、様々な状況を想定し、各学期に適宜実施しているが、さらに改善を進めていく。

### －学校行事について－

今年度は、未曾有のコロナ禍のため、本校の伝統行事であり、重視している「学舎・学習旅行」等、宿泊を伴う校外学習が、6年生の修学旅行以外、実施することが叶わなかった。

今年度中止を余儀なくされた「学舎・学習旅行」については、コロナウイルス感染防止に努めるとともに、状況を踏まえて実施する方向で取り組みを進めていく。従って、新型コロナウイルスの感染状況によっては、中止や延期など行事を変更する可能性は否めない。

「運動会」「音楽会」「耐寒生駒登山」等の行事や社会見学等の「校外学習」、「保護者会」「学習参観」等の行事についても、新型コロナウイルス感染防止に努めながら、実施する方向で取り組みを進めていく。

#### －ケータリング給食について－

来年度も週3回のケータリング給食を学期毎の選択制を取り入れて実施する。また、安全で安心して食べられる、よりよいケータリング給食となるように業者と協議を進めていく。今後さらに、子供たちが楽しみにするようなケータリング給食となるよう改善を進めていく。

#### －近小ゼミ（高学年） 放課後学習（低学年）について－

普通の学校での学習の取り組みが定着しており、その上で、さらに個々の学力を高めていきたいという児童（4年生以上）を対象として、近小ゼミを週3回（月・火・木）行っている。ここ数年、参加する子供たちの中には、学習意欲と基礎学力の低下を感じさせることもあり、今後はゼミの在り方について抜本的に見直し、新たな取り組みへと進展させる。

尚、附属中学校への内部進学に近小ゼミの参加は必須ではなく、附属中学校への内部進学においては、日々の小学校での学習への取り組み方に重きを置いている。今後は、1～3年生においても、不定期ではあるが、放課後学習を実施し、基礎学力の定着に努める。

#### －進路・進学について－

進路・進学についての情報の開示に努めるとともに、進路説明会の実施等により、柔軟な進路選択と高い進路保障を実現するための取り組みを進めていく。併せて、来年度より、1学期末段階で「内部推薦プレ判定」を行い、個々の進路の状況が保護者・児童にわかりやすくなるように進めていく。

附属中学校への内部進学については、得点や模試の偏差値では測れない学力や主体的に行動することができる児童を推薦するという基準に基づくが、当然、小学校での基礎学力の定着は不可欠である。推薦制度を利用して進学した子供たちは、今年度50名である。今後とも、よりよい推薦制度を目指して取り組みを進めていく。

#### －学級や授業の雰囲気について－

学年主事を中心として、若手教員の資質向上はもとより、各教員の資質・指導力・力量等の向上に努め、学年集団の連携を深め、それぞれの学年の指導の充実に努める。また、ホームページ等を活用して、学校生活の様子をより詳細に開示していく。

#### －附属幼稚園との接続について－

今年度は、コロナ禍のため、附属幼稚園とのスムーズな接続を目指し、連絡会を含めた交流活動を活発に実施することが叶わなかった。近畿大学の附属校として、今後とも連携を深めていきたい。

尚、本年度の附属幼稚園からの内部推薦進学者は29名であった。

#### －保教会活動について－

今年度、保教会行事は、新型コロナウイルス感染防止のために殆ど実施することができなかった。保教会は、本校の教育推進と本校児童の支援のための大切な組織である。従って、子供たちを中心に「教保生羈然一体」となって、子供たちの確かな成長を目指して教育活動を進めていくことができるよう、今後ともよりよい関係の構築に努めていく。また、保教会役員・委員の負担が過剰とならないように、継続して協議を進めていく。

### (4) 保教会運営委員アンケートの考察

昨年同様、本年度も、コロナ禍のため、保教会運営委員の皆様に対するアンケートを残念ながら実施することができなかった。

## 4. 学校関係者評価について

### －児童募集について－

昨年度、96名の入学者、本年度99名と、定員を大きく下回っており、早急に是正策を講じる必要がある。とりわけ、大阪、奈良別の増減を分析し、児童募集について学校全体が丸となって取り組みを進めていくようにとの提言を受けた。

### －ICT教育について－

タブレットの利活用については、教育活動の全てに対応できるものではなく、あくまでも教具としてのツールであるといった意識を教員のみならず、子供たちにも強く意識付けする必要がある。時勢として、ウィズコロナからポストコロナへと移行してきているので、子供たちが興味・関心を持って臨める授業の構築を図る必要があるとの提言を受けた。

### －挨拶について－

「挨拶」の習慣が悪化してきていることに対して、「挨拶をしっかりしましょう」といった呼びかけに終始するのではなく、「相手の目を見て、きちんと挨拶できるように」具体的な方策を講ずる必要がある。「挨拶」は社会人としての基本事項であり、非常に大切なことであるため、早急に是正するようにとの提言を受けた。

### －内部推薦制度について－

附属中学校への内部推薦制度の基準としている「努力評定」には、どうしても女子が有利になる面があることは否めない。附属高校においても、附属小学校同様に、卒業時の表彰（学園賞・校長賞等）を受賞するのは女子が多いという事実がある。これらも踏まえ、附属中学校への進学後も活躍できるよう「基礎学力」や「学習力」を確かに身に付けた児童を推薦できるように制度の改善に取り組むようにとの提言を受けた。

### －学舎・学習旅行について－

コロナ禍のため、多くの校外指導が中止に追い込まれた現状において、6年生の修学旅行が実施できたことは高く評価したい。多くの困難の下、実施に踏み切ったことは英断である。

### －附属幼稚園との接続について－

幼小接続に関しては、附属学校の要であり、今後も継続して取り組みを一層活発に進めていくようにとの提言を受けた。

総括として、次の3点について指摘された。

1点目は、私立小学校として「ブランドイメージ」の構築を図るとともに、保護者が期待していることについて的確にリサーチすることを学校経営の基盤に据える必要があるとのことである。2点目は、小学校教育を通して、子供たちに何ができるのかを的確に把握し、それに基づいて学習指導や生活指導を進めていく必要がある。とりわけ、教員が楽しく取り組まなければ、児童が学校生活を楽しむことはできない。教員自身が意欲に満ちて勤務に励むことができるようにしていくこと。3点目は、近畿大学学園の附属小学校として、教育の質の向上を目指した取り組みを進めていくようにとのこと。

以上、本年度の教育活動について概ね了承が得られた。引き続き、近畿大学学園の附属小学校として、附属幼稚園との一貫教育に基づく教育活動を展開するとともに、附属中学校・高等学校、大学との連携を深めていくことで、私学としての質の高い教育を提供し、児童や保護者の信頼や期待に応えられるよう教育改善を進めていく。

